



農事普及だより

(5月号 令和2年5月1日～5月31日)

〈発行〉 鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町産業課
つがるにしきた農業協同組合鶴翔統括支店
西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室
〈編集〉 西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室



気象

(令和2年4月16日 仙台管区気象台発表
東北地方1か月予報より)

東北日本海側では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。日照時間は、東北日本海側で平年並または少ない確率ともに40%です。



水稻

健苗育成と適正施肥、良食味・
高品質米を生産しよう！

1. 育苗

- 温度管理**
5月は気温が高くなり、ハウス・トンネル内の温度も上昇するため、積極的な換気に努める。
降霜や低温が予想される場合は、被覆資材やストーブなどで保温する。
- 水管理**
かん水するタイミングは、床土が乾き、苗の葉が巻き始めた頃で、午前中に箱底まで届くようにたっぷりかける。
機械的に毎日かん水すると、草丈が伸びる割には葉齢の進まない軟弱苗となり、田植え後の活着や初期生育が劣る。育苗中はできるだけ節水し、硬い苗に育てる。
- 追肥**
田植え前に苗の葉色が淡くなった場合は、1箱当たり硫酸5g(窒素成分で1g)を水500mlに溶かして追肥する。追肥後は、肥料ヤケを起こさないよう葉が乾く前にかん水して肥料分を洗い流す。

2. 本田

- 畦畔の補強**
畦畔にネズミ穴などがあると水持ちが悪くなり、除草剤の効果が劣ったり、低温時の深水管理が十分でなくなるので早めに補強する。
- 施肥**
昨年、稲が倒伏したり、いもち病が発生した水田では、窒素量を減らす。
なお、窒素量が多すぎると、食味・品質の低下や倒伏、いもち病等の原因となるので地帯別、品種別施肥基準を遵守する。

■施肥量(窒素成分量)の目安 (中苗移植)

品 種	施肥体系	窒素総量 (kg/10a)	基肥 (kg/10a)	追肥 (kg/10a)
つがるロマン	表層1回追肥	6～8kg	4～6kg	2kg以内
まっしぐら	表層1回追肥 表層2回追肥	6～9kg	総量の7～8割 総量の6割	総量の2～3割 1・2回目とも2割
青天の霹靂	●施肥体系は表層1回追肥体系を原則とする。 ●適正な生育量が確保できるよう、 基肥は窒素成分量で6kg/10a程度 とする。 ●追肥時期は幼穂形成期とする。 追肥の窒素成分量は乾田で2kg/10a、半湿田で1kg/10a以内を目安 とする。 ●転作後の復元初年目の水田は施肥による生育コントロールが困難なので、作付けしない。			

- 代かき**
代かきは、田面に高低差が生じないように行う。
生わら鋤込み田や田畑輪換田等の作物残渣がある水田では、残渣を土中に鋤込むため、浅水で代かきを行う。
- 田植え**
日平均気温が13℃以上になるときを目安とする(五所川原アメダスの平年値では5月13日以降)。代枯れ防止と活着促進のため強風の日は避け、温暖な日を選ぶ。
「青天の霹靂」の栽培株数は70株/坪程度とし、直播栽培・疎植栽培は行わない。
- 田植え後の水管理**
田植え後は直ちに水を入れ、初期生育促進のため、低温時は苗が冠水しない程度の深水管理、高温時は浅水管理とする。
昼間止水・夜間かんがいを基本とし、掛け流しはせず、水温を上げるようにする。
- 除草剤の使用法**
除草剤は、前年発生した雑草を考慮して選び、使用基準を守る。なお、除草剤を適正に使用しても特定の草(アゼナ、ホタルイ等)が大量に残る水田では、抵抗性雑草が発生している可能性があるので、これらに効果のある除草剤を選択する。
初期～中期の体系処理の場合は、中期剤の効果が遅れないように適期に散布する。
河川等の水質を保全するため、**散布後7日間**は絶対に落水・掛け流しをしない。

⑦ 病害虫防除

- 箱施用剤使用の留意点**
いもち病や初期害虫等を予防する箱施用剤は、薬剤毎に使用時期や方法が異なるので、農業の登録内容等を確認して適正に使用する。
- イネミズウムシ**
移植前や移植時に防除をしなかった場合は、発生に応じて防除する。
発生が多い場合には6月上旬頃に水面施用剤を散布する。この時期の防除によりイネドロイムシも防除できる。
- 葉いもち**
補植用苗はほ場に放置したままにしておくと「葉いもち」の発生源となるので、補植が終わったら直ちに処分する。
- 農業危害防止**
育苗跡地で野菜等を栽培する場合は、育苗箱用の農業処理を育苗ハウス外で行うか、ハウス内で行う場合はビニールシートなどの無孔シートを使用するなど、農業が土壌に浸透しない対策を行う。



りんご

県生育観測ほ(板柳町五幾形)のふじの萌芽日は**3月30日(平年4月9日)**と平年より10日早く、展葉日も**4月13日(平年4月19日)**と平年より6日早かった。**4月第2半旬**からの低温で生育が停滞気味となっているが、今後の気温が平年並に推移した場合、県生育観測ほ(板柳町五幾形)のふじの開花日は**5月7日頃**と予想される。

1. 霜害防止対策

- 開花前後は最も低温に弱い時期のため、霜注意報が出されたら霜害防止対策を確実に実施する。
- 霜害発生危険温度**
花蕾着色期で-2℃、開花始め～落花期で-1.5℃～-1.7℃の低温に約60分遭遇すると被害が出始める。
降霜は、晴天無風で午後7時の気温が6℃以下の日の翌日早朝に発生する可能性が高い。
 - 燃焼法**
霜注意報が出たら、自園の気温の動きを観察し、0℃になったら燃焼資材に点火する。
 - 送風法(防霜ファン)**
防霜ファンを設置している園地では、ファンの始動温度を2℃に設定しておく。
寒気を伴ったときや著しく低温になったときは、防止効果が低いので燃焼法を併用する。
効果的に被害を受けた年もあったことから、結実後でもファンのスイッチは切らない。
 - 事後対策**
開花期までに霜害にあった場合は、結実量を確保するため、必ず人手授粉を実施する。その際、めしべの被害程度を確認して授粉する。

2. 人手授粉による結実確保

マメコバチを導入していない園地では、安定した結実量を確保するために人手による授粉を徹底する。また、マメコバチ導入園においてもその数が少ない場合や不順天候が続く場合には、人手による授粉を行って結実確保に努める。

3. 摘花・摘果

良品安定生産のためには早期適正着果が重要であるので、摘花を積極的に実施する。ただし、降霜常襲地帯や開花期に天候不順が予想される場合は、一輪摘花の実施や摘花剤の使用を控え、えき芽花の摘み取りにとどめる。

(1) 摘花

- 人手による摘花
弱い花そうやえき芽花等の不要な花そうは、全花摘み取る。
- 摘花剤の利用
結実が十分確保されると見込まれる場合は、石灰硫黄合剤又はエコルーキーを利用する。使用方法是次表のとおりである。なお、いずれの剤も展着剤は不要である。

■石灰硫黄合剤及びエコルーキーの使い方

薬剤名	散布時期	本剤の使用回数	成分総使用回数	希釈倍数	10a当たり散布量
石灰硫黄合剤	満開後 (頂芽花の満開日とえき芽花の満開日)	2回	—	100～120倍	350%以上
エコルーキー	満開日 追加散布を要する場合はその2～3日後に1回	2回以内	2回以内	100～150倍	300～600%

(2) 摘果

- 人手による摘果
摘果は早いほど良いが、実止まりが判別できない時期(落花10日～15日後頃まで)にはまず一つ成り摘果を行う。
ただし、つがる、デリシャス系など年により早期落果の多い品種は、落花10日後頃までに一つ成り摘果を終える。
仕上げ摘果は、陸奥では落花15日後頃までに、他の品種は落花25日後頃までに終える。
- 薬剤による摘果
ふじ、王林、陸奥、北斗、シナノスイート、さんざ、早生ふじ、トキを対象に各品種の満開後2週間頃(ふじでは横径が10mm位の時)、紅玉は満開後3週間頃(横径が16mm位の時)にミクロデナボン水和剤85(1,200倍、展着剤加用)を、果実に十分かかるよう10a当たり350～500リットル散布する。

4. 病害虫防除

- モニリア病**
葉腐れは柱頭感染(実腐れ)の伝染源となるので、見つけ次第、摘み取って土中深くに埋めるなど、適正に処分する。
- 黒星病**
「落花20日後頃」までが防除上最も重要な時期なので、**間隔をあけず10日間隔で散布**する。散布予定日に降雨が予想される場合は、前日に散布する。低温、多雨等で開花期間が長引いた場合には、満開を過ぎたら花が残っていても「落花直後」の散布を行う。
なお、天候が不順の場合は6月いっぱい10日間隔で散布する。
- ミダレカクモンハマキ**
発生が多い園地では、「開花直前」及び「落花直後」に1GR剤(ロムダンフロアブル、カスケード乳剤、アタブロンSC)、Bト剤3,000倍(ファイブスター顆粒水和剤、バイオマックスDF)のいずれかを選択し、同一薬剤を連続して散布する。
- リンゴコカクモンハマキ**
越冬世代幼虫が多い園地では「落花直後」にカスケード乳剤又はアタブロンSCを散布する。

5月は黒星病重点防除時期なので、薬剤の散布間隔は10日以内を遵守し、黒星病対策を徹底しよう！

人手受粉も取り入れ、結実の確保に努めよう！

霜害防止対策を万全に、適期作業と適正防除で良品生産を目指そう！

■燃焼法による防止

種類	利用方法
A重油 オイル缶	4リットル缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。
電力カット	おがくず：灯油＝2：1(容量)の割合で混ぜたものを2kgずつ袋に詰め、10a当たり40～60個を配置する。

注) 1 灯油の保管量が200～1000%：少量危険物貯蔵届出書の提出が必要
2 1000%以上：危険物取扱者の資格が必要
3 所轄の消防署に「火災と粉わい煙又は火災を発する恐れがある行為の届出書」などを提出する。

- 注) 1 満開日は7～8割が開花した日で、花びらの散り始めでもある。
2 マメコバチに対して害作用がないので、マメコバチ導入園で利用しても良い。
3 ミツバチ導入園で石灰硫黄合剤を利用する場合は、散布前にミツバチの巣箱を回収する。
4 エコルーキーは、花そう葉又は新梢幼葉の葉縁部に褐変(葉焼け)症状が発生する場合

■標準的な着果程度

品 種	摘果の強さ(残す果実)	着果率(%)
紅 玉	3頂芽に1果	33
つ が る ・ ジョナゴールド	3.5頂芽に1果	29
ふじ・王林・さんざ・きおう・トキ・早生ふじ・未希ライフ・シナノスイート・シナノゴールド・ぐんま名月	4頂芽に1果	25
北 斗	4.5頂芽に1果	22
陸 奥 ・ 世 界 一	5頂芽に1果	20

黒星病徹底防除推進期間(4月～6月)

(5) クワコナカイガラムシ

発生が多い園地で、「展葉1週間後頃」にアブロードフロアブルを散布しなかった場合は、「落花10日後頃」と「落花20日後頃」に薬剤による胴水洗いを行う。

■薬剤散布 散布は10日間隔を守り、十分濡れるように散布する。

回	散布時期	基 準 薬 剤		散布量 (kg/10 a)
追加	追加 散布 (4月26日～ 27日頃)	ベフラン液剤25 又はストライド顆粒水和剤	1,000倍 1,500倍	300
第2回	ふじの開花直前 (5月5日～ 6日頃)	オルフィンフロアブル 又はネクスターフロアブル 又はフルーツセイバー 又はバレード15フロアブル	4,000倍 1,500倍 2,000倍 2,000倍	320
第3回	ふじの落花直後 (5月14日～ 15日頃)	ユニックス顆粒水和剤47 ＋ チウラム剤 又はジマンダイセン水和剤 又はベンコゼブ水和剤	2,000倍 500倍 600倍 600倍	350
第4回	ふじの落花 10日後頃 (5月23日～ 24日頃)	炭酸カルシウム水和剤 チウラム剤 又はジマンダイセン水和剤 又はベンコゼブ水和剤	100倍 500倍 600倍 600倍	350
第5回	ふじの落花 20日後頃 (6月2日～ 3日頃)	炭酸カルシウム水和剤 チウラム剤 又はジマンダイセン水和剤 又はベンコゼブ水和剤	100倍 500倍 600倍 600倍	420

5. ヒオモン水溶剤によるふじ・早生ふじのつる割れ防止対策

- 本剤の効果**
開花が早く、大玉になりやすい年や、例年つる割れの多い園地では、ヒオモン水溶剤3,000倍を満開20～30日後散布によりつる割れの発生を軽減できる。
- 使用上の注意**
極端に樹勢の弱い樹への散布は避け、展着剤は使用せず、単用散布とする。
高温・乾燥時の散布で、新梢先端部の黄変落葉や頂芽の欠落が発生した事例があるので避ける。また、果実肥大が抑制される場合がある。散布後に葉がしおれる症状(エビナスティ)を示すが、1週間後頃にはほぼ回復する。
摘果剤(ミクロデナボン水和剤85)を散布した後に本剤を使用した場合、摘果剤の効果が抑制される。

農薬適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気を付けましょう！

- 使い残した農薬などは、河川等へ絶対捨てない。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認しましょう。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

特産果樹

霜害防止対策の徹底と適期作業、適正防除で良品生産を目指そう！



ぶどう

1. 霜害防止対策

りんご同様、霜注意報が出されたら、霜害防止対策を確実に実施する。

2. 摘芽・摘梢

養分の競合を防ぎ、日当たりや通風を良くするため、できるだけ早く実施する。
不定芽から伸びたもののうち、予備枝として利用できるもの以外は摘除する。
晩霜害の恐れがある園地では、6月上旬の晩霜の心配がなくなってから最終新梢数とする。
樹勢が強い樹では花振るい防止のため、やや多めに残し、結実の状態をみてから、最終新梢数とする。最終新梢数は主枝1m当たり8～10本とする。

3. 病害虫防除

- ツマグロアオカスミカメ**
発生が多い園地では、展葉直前(5月上旬)にモスピラン顆粒水溶剤2,000倍を散布する。
- 灰色かび病**
新梢伸長期に多発生が懸念される場合は、スチューベンではポリオキシンAL水和剤又はDM1剤(インターフロアブル又はオンリーワンフロアブル)、シャインマスカットではDM1剤(インターフロアブル又はオンリーワンフロアブル)を散布し、新梢での被害を防止する。
- べと病**
発生が多い園地では、スチューベンでは新梢伸長期(約20cm)にジマンダイセン水和剤、開花10日前(6月上旬)にアリエッティC水和剤又はキノンドー水和剤40、シャインマスカットでは新梢伸長期(約15cm及び約30cm)にジマンダイセン水和剤を選択する。
また、発病葉や発病果房は見つけ次第、摘み取って処分する。

■薬剤散布

灰色かび病、黒とう病、べと病の重点防除時期なので、昨年の病害発生状況・天候に応じて防除薬剤を選択する。なお、水稲育苗ハウス内にシャインマスカットが栽培されている場合、農業散布、摘芽・摘梢等各種管理作業は、育苗箱搬出後に行う。

※農薬はりんご園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



※1 追加散布では、展葉1週間後頃の散布までにベフラン液剤25を2回使用している場合は、ストライド顆粒水和剤を選択する。

※2 散布月日は、天候や生育状況により変わるので、最新の情報を確認する。

春は空気が乾燥し、火災が発生しやすい時期です。剪定した枝などをやむを得ず園地で焼却する場合は、山火事など火災の発生防止を徹底してください。

※農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



〈スチューベン〉				〈シャインマスカット（露地栽培）〉			
散布時期	基 準 薬 剤	散布量 ($\frac{\text{kg}}{10\text{ a}}$)		散布時期	基 準 薬 剤	散布量 ($\frac{\text{kg}}{10\text{ a}}$)	
新梢 伸長期 (約20cm) (5月 中旬)	ジマンダイセン水和剤	1,000倍	200	新梢 伸長期 (約15cm) (5月中 ～下旬)	ジマンダイセン水和剤	1,000倍	200
	又はポリオキシンAL水和剤	500倍			又はインダーフロアブル	8,000倍	
	又はインダーフロアブル	8,000倍			又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍			パダンSG水溶剤	1,500倍	
	パダンSG水溶剤	1,500倍			又はアグロスリン水和剤	2,000倍	
開花 10日前 (6月上 ～中旬)	又はアグロスリン水和剤	2,000倍	250	新梢伸長 期(約30 cm)(6 月上旬)	又はアディオフロアブル	1,500倍	200
	又はアディオフロアブル	1,500倍			ジマンダイセン水和剤	1,000倍	
	アリエッティC水和剤	800倍			又はインダーフロアブル	8,000倍	
	又はキノンドー水和剤40	600倍			又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	
	又はインダーフロアブル	8,000倍			アリエッティC水和剤	800倍	
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	250	開花 10日前 (6月 中旬)	ベストガード水溶剤	1,000倍	250
	ベストガード水溶剤	1,000倍			又はパダンSG水溶剤	1,500倍	
	又はパダンSG水溶剤	1,500倍			又はアグロスリン水和剤	2,000倍	
	又はアグロスリン水和剤	2,000倍			又はアディオフロアブル	1,500倍	
	又はアディオフロアブル	1,500倍					

＊おうとう＊

1. 霜害防止対策

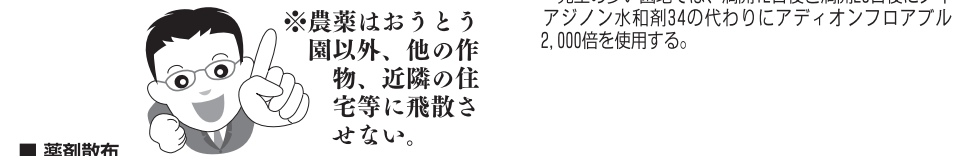
りんご同様、霜注意報が出されたら、霜害防止対策を確実に実施する。

2. 結実確保

毛ばたきやマメコバチ等による授粉を積極的に行う。毛ばたきによる授粉は、5分咲き頃と満開期頃に少なくとも2回は行う。

3. 摘 果

紅秀峰や樹勢の弱った佐藤錦等は、結実過多により小玉になりやすいため、満開後30日頃までに摘果を行う。着果程度は、1花束状短果枝当たり2～3果程度とする。



■ 薬剤散布

散布時期	基 準 薬 剤	散布量 ($\frac{\text{kg}}{10\text{ a}}$)
満開5日後 (5月上旬)	バスタード顆粒水和剤	1,500倍
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍
	又はラーイー水和剤	2,000倍
	又はオーシャイン水和剤	3,000倍
満開12日後 (5月中旬)	オーソサイド水和剤80	800倍
	ダイアジノン水和剤34	1,000倍
満開25日後 (5月下旬)	オーソサイド水和剤80	800倍
	ダイアジノン水和剤34	1,000倍

注) バスタード顆粒水和剤はぶどうの「スチューベン」、「バツファロー（アーリスチューベン）」、「ポートランド」など一部の品種で、軽微な葉害を生じることがあるので飛散しないよう注意する。

畑 作

大豆の適正は種、小麦の適期の追肥で生育量を確保しよう！

＊大豆＊

1. ほ場準備

転作田では排水対策として、ほ場周囲に明きょを掘る。水稲作から大豆作に切り替える時は苦土石灰などを施用し、pH6.0～6.5を目標に土壤酸度を矯正する。水分が多い状態での事前耕起は、ほ場の物理性が悪化するので、乾燥した状態で作業し、回数も最小限に抑える。湿害を受けやすいほ場では、うね立ては種等で被害を軽減する。

2. は種期・栽植密度

は種適期は5月中旬～下旬、は種量は7～8kg/10aを目安とする。栽植密度は畦幅70cm前後、株間15cmの2本立てを基本とする。

は種直後の多雨は、出芽率の低下や初期生育の不良を招くので、気象条件に注意しながら作業する。やむを得ず、は種が遅れる場合は株間を詰め、は種量を増やす。

3. 施肥量

基肥は、窒素成分量で2～3kg/10aを基準とし、土壌条件、連作等を考慮し増減する。

4. 種子消毒とわい化病の予防

必要に応じて、下記の剤で塗沫処理を行う。

○：効果あり ×：効果なし

剤 名	鳥害防止	紫 斑 病	アブラムシ類（わい化病）
キヒゲンR－2フロアブル	○	○	×
クルーザーFS30	×	×	○
クルーザーMAXX	○	○	○

注）クルーザーFS30は鳥害防止効果がないので、鳥害が予想される場合は事後にキヒゲンR－2フロアブルの塗沫処理を行うこと。

5. 根粒菌の接種

大豆栽培初年目のほ場は、根粒菌の着生が悪く生育に影響するので、種子消毒後に市販の根粒菌を粉衣する。

6. 雑草対策

は種後、速やかに土壌処理除草剤を散布する。ほ場の細土が粗い場合や、ほ場表面の水分が低い場合は効果が劣るので、耕うんをていねいに行うとともに、明きょやザブソイラー等による排水対策を行う。

＊小麦＊

1. 生 育

今年は、気温が高く推移したため、小麦の生育がかなり早まっており、幼穂形成期の到着状況は、地域やほ場で差が大きい。

2. 追 肥

2回目の追肥適期は、一穂粒数の確保やタンパク質含有率向上に有効な「止め葉抽出期」から「出穂期」頃で、例年5月中旬から下旬頃。今年は生育が早まっているので次の目安を参考にほ場を観察し、遅れないように実施する。

なお、追肥量は、窒素成分で2kg/10aを基準とし、生育に合わせて増減する。

3. 排水対策

転換畑では出穂期以降の湿害を防止するため、明きょの設置や排水溝の点検を行う。

4. 病害虫防除

- 赤かび病**
開花期から乳熟期にかけて、気温が高く湿潤な天気が続くことが多くなるので、開花始め～開花期に1回目、その7日後に2回目の薬剤散布により防除する。
感染すると収量や品質が低下するばかりでなく、人畜に有害なかび毒（デオキシニバレノール）を生産し、下痢や嘔吐などの中毒症状を起こす場合があるため、出荷できなくなる。
- うどんこ病**
茎数が多く、草丈が伸びているほ場で発生が予想されるので、病害虫発生予察情報等に注意し、適期防除に努める。

＊野菜＊

トマト

1. 定植後の管理

定植後、活着までに日数を多く要し、葉露が発生しない場合は、株元に手かん水を行う。その時に葉色が淡い場合はかん水を兼ねて液肥を株元に施用する。

■ 追肥肥料例 (2,100株／10 a)				
肥料名	倍数	1株当たり	必要量／10 a	回数
OK－F－1	700倍	300cc	水 600ℓℓ；肥料857 g	3～4日おき

根張りを良くするため、かん水は控えめに行う。ハウス内の温度は昼間25℃前後で管理する。最低気温は15℃以上を目標とし、夜間冷え込むことが予想される場合は、被覆資材や暖房器具等を設置し気温の低下防止に努める。1段花房の第4花の開花始めにトマトーンを処理する。わき芽は定植後に活着してから摘み取るが、できるだけ晴天の日に行う。

2. かん水・追肥

試しかん水は、2段花房のトマトーン処理後に1株1リットルを目安に行う。本格的なかん水・追肥は、3段花房の開花期から行うこととし、1回当たりの追肥量は窒素成分で約0.5kg／10a以内とする。追肥による根焼けを防止するため各液肥の基準希釈倍数は遵守する。

メロン

2. 定植時の留意点

定植時には、いわゆる「活着水」として、ゆるま湯をポットにかん水すると良い。また、活着水に液肥等を入れると発根促進に効果的である。

定植は温暖な日を選び、作業は朝から夕方まで（地温が下がり始める前まで）とする。根鉢を崩さないようにポットから取り出し、深植えにならないように鉢土の上部がマルチ面よりやや高くなるように植え、株元には土を寄せない。

3. 定植後の管理

- 整 枝**
活着後、子づるの伸長を確認したら、生育が揃った2本を残し2本仕立てとする。この際、株元の葉や孫づるなど不要な側枝は除去し、整枝作業終了後に薬剤散布する。
- 温度管理等**
最高気温28～30℃、最低気温12～15℃を目安に、トンネルの開閉、保温資材（保温キャップ等）の活用でこまめな温度・湿度管理を行う。トンネルの換気は苗の反対側のみ裾上げする。最上位葉展開時、その6～7節上の花芽が分化開始する。子づるの5葉展開時から開花・結実までの管理が良品生産に重要である。

■ 花芽発育時の条件と果形との関係（タカミ）

【高温・多湿】 草勢が強い	【適温・適湿】 適正な草勢	【低温・乾燥】 草勢が弱い
 腰高が際だちラグビーボール状、デブソ果の発生も多い	 腰高で、ボリューム感あるタカミ本来の形状	 タカミ本来の腰高形状が見られず、円形に近く、小玉

＊花き＊

キク

1. 育苗管理及び定植

8月出荷・無摘心栽培、9月出荷・摘心栽培は、6月が定植適期となるため、出荷時期に合わせて挿し芽作業を行う。

育苗期間は15～20日を目安とし、根長が1～2cmになったら定植する。特に小さめのセルトレイで育苗した場合は、苗が老化しないよう注意する。

施肥は全量で窒素成分1～2kg/aを基準とし、基肥として6～7割を施用する。施肥前に土壌診断を行い、それに合わせて施肥量を調整する。追肥は、葉色や生育の状況に応じて適宜行う。温度変化が激しい時期なので、低温時には保温を行うなど、こまめな温度管理に努める。

2. 病害虫防除

白さび病は、温度20℃前後の多湿状態で発病しやすい。施設内の換気に努め、親株管理の段階から薬剤による予防散布を行う。また、ハモグリハエ類、アザミウマ類、アブラムシ類等の発生に注意し、早期発見・早期防除に努める。

トルコギキョウ

2. 枝整理と摘蕾

地際から20cmくらいまでの側枝は早めに摘み取り、主茎の生長を促す。その際、付け根から除去しないと、再び側枝が発生するので注意する。また、1番花は手で摘み取る大きざになったら早めに除去し、その後に出荷時の開花のそろいを考慮して、不要な枝と蕾を整理する。

3. 病害虫防除

アザミウマ類、アブラムシ類等の発生に注意し、早期発見・早期防除に努める。

土づくり

施設栽培のほ場では、肥料成分の過剰蓄積が見られるため、ほ場準備に当たっては土壌診断に基づく適正な施肥を行う。

リンドウ

1. 芽整理

2年目以降は、芽の整理を行い株が衰えないように管理する。草丈30cm頃までに、茎を1株当たり7～9本残し、その他の茎は先端から5cm程度を摘心する。

2. フラワーネット

早生種、中生種（ながの2号、しなの極早生等）は2段張りでも良いが、晩生種（しなの2号、しなの3号等）は3段張りとする。5月以降は生育が旺盛になるため、できるだけ早く張り、こまめに引き上げる。最上段のネットは、りんどうの生長点付近の位置に張り、最下段は草丈半分位置にする。

3. 病害虫防除

葉枯病、アブラムシ類等の発生に注意し、早期発見・早期防除に努める。

町農業委員会では、毎年6月中旬から農地パトロールを実施し、遊休農地や、放任園等の発生防止に取り組んでいます。農地の貸借や売買については、町農業委員会へご相談ください。

「農業の相談はこちらへ」
農業についての各種相談を受け付けております。受付した内容は即時対応いたしますので、気軽にご相談ください。
鶴岡町農業支援センター 午前9時から午後5時 ☎22－2111（役場産業課）

～農事普及だよりは町ホームページにも掲載しております～

URL <http://www.town.tsuruta.lg.jp/kurashi/kurashi-nougyou/post-117.html>